

ドキュメント 進路指導

4

徳島県立
脇町高校
ディベート指導

徳島県立
浜松南高校
生徒に語りかける指導

D V Q E

W C U M

E N T

生きる力を養ったための指導法を模索する教師の足跡

ディベート指導

は岡田善史先生に
とって、文字どお
りゼロからのスタートだった。

徳島県立脇町高校進学課では、平成8年度よりそれまで学年やクラスにより内容がまちまちだった小論文指導を、学校ぐるみの取り組みとすることにした。小論文委員会が設置され、「情報ノート」「文章指導」そして「ディベート」が3本の柱とされた。

「情報ノート」とは生徒にノートを渡し、新聞記事の中から興味のあるものをスクラップさせるというもの。最初、生徒たちは思いつくままに雑多なジャンルの記事を貼りつけていたが、興味の方向性が定まっていこうちに、スクラップする記事のテーマも絞られてくる。自分の興味・関心を発見させ、情報収集能力を養うのが目的だ。「文章指導」としては、小論文模試を受験させたり、校内小論文コンクールを実施する。また小論文のテキストを生徒に配って、課題と

して提出させるなど、実践的な論文能力の養成を図っている。

そして「ディベート」。だがディベートについては、言葉では知っていても、実際に経験している教師はほとんどいなかった。岡田先生も別段、ディベートに関心があったわけではない。小論文委員会の組織作りの中で、ディベート担当に指名されたからかかわることになったにすぎなかった。むしろ当初は、ディベートに対して生理的な違和感さえ持っていたという。

「私はどちらかというと、体育会系タイプなんです。いいものはいいい、ダメなものはダメ。詭弁を弄するような人間は信用がおけないという発想が身についているんです。だからディベートには抵抗があった。ディベートがおもしろいと思つたようになったのは、講習会を受けた後、生徒を指導しているうちに、少しずつですね」

平成8年6月、

岡田先生は脇町高校進学課の4人の教師と、愛媛大で開かれた全国教室ディベート連盟四国地区の講習会に参加した。ディベート指導を導入するには、まず教師自身がディベートについて知っておく必要がある。講習会では、ディベートの概念や進めていくうえでのルールを学んだ。また、実際に岡田先生自身も「学校完全週休2日制を実施すべし」というテーマなどでディベートを行った。

先生は最初、ディベート独特の討論のしかたに戸惑ったという。例えば「景気回復のために、消費税を3%に引き下げるべし」というテーマ



徳島県立 脇町高校 楽しみながら 論理的思考力の 養成を実現



徳島県立脇町高校進学課
岡田善史 Okada Yoshimi
同校に赴任して8年目になる。
担当科目は生物科。
現在1年生のクラスを受け持ち、
学年主任を兼務。
男子ソフトテニス部顧問も務める。

があったとする。そんなとき私たちは、自分の信条から賛成・反対を述べるだけに終わりがちだ。だがディベートとは、消費税を3%にした結果どのようなことが起きるかを想定し、そのときに生ずるメリット・デメリットについて肯定・否定側に分かれて討論するというゲームである。テーマの是非を、常にその結果を想定することから決めていくというものだ。

最初は困惑した岡田先生だったが、ディベートのルールを把握するうちに「むしろ考える手順が決まっているところがディベートのいいところだな」と思えるようになってきた。ディベートのルールとして、まず肯定側はた

ディベートでは、論点の絞り込み、資料の引用と、その手順が決まられている。これは小論文作成の際にも応用できる流れだ。

んのメリットの中から一つだけメリットを絞り込む。次にそのメリットが生ずる理由を説明し、証拠資料を引用。さらにそのメリットが及ぼす効果について言及する。一方否定側も、たかさんのデメリットの中から、一つだけデメリットを絞り込み、そのデメリットが生ずる理由について説明するといつづつ、討論の手順までが細かく決められている。この討論の手法に訓練を通して慣れると、小論文で論理的な文章を書く際にも応用することができる。

「ディベートには、実はもう一つ利点があるんです。これは講習会よりずっとあとになって気がついたのですが、世の中にはいいものはいいい、ダメなものはダメで決められないことがたくさんあるんですね。村に道路を作ることにしても、生活が便利になるといつメリットと環境が破壊されるといつデメリットとの背中合わせになる。メリット・デメリットのどちらにも視野を広げられる生徒を育てるためにも、ディベート指導は意味のあるものだと思うんです」

講習会のあと、

ディベート指導を学校の中で具体的にどのよう形で取り入れるかについて、進学課の教師の間では二つの意見が出された。一つは、まずはディベートに関心を持っている生徒の指導から始め、それを徐々に全校的な広がり結びつけていくというやり方。もう一つは最初から全校的に取り組んでいくというやり方。岡田先生は「経験者はだれもあらず、みんなが同じスタート地点に立っている。だったら最初



から全校的に始めた方がいい」と考えた。結局この意見が採用され、ディベート指導はHRの時間を使って全学年を対象に行われることになった。実施回数は、1年生1回、2年生3回、3年生2回と決められた。

初めてのディベート活動は、1、2年生を対象に、平成8年度の12月から1月にHR3週間分を確保して実施されることになった。まず各クラスの担任の教師が、生徒にディベートについての説明を行う。次に生徒を4人で1班のグループに分ける。そして4人のうち、2人を肯定側、残りの2人を否定側に振り分けてディベートをさせるといわけた。ゲームは2試合で、タッグを組んだ生徒のうち1人が討論する側に回り、もう1人は参謀役を務める。2試合目は討論役と参謀役が入れ替わる。テーマが生徒に提示されたのは1週間前で、第1回は「小学校に英語教育を導入すべし」だった。

ディベートのHRを実施する直前には、2年生の担任を集めて、ディベートについての理解を深めてもらうための講習会が開かれた。だがそこで岡田先生は、担任の先生方の戸惑いを目的の当たりにすることになる。

「講習会が終わってしばらくすると、一部の

岡田先生はスタジオにいたために生徒の反応を直接見ることはできなかったが、「楽しそうでしたよ」という報告を数人の教師から受けた。普段は寡黙で教室でめだたない生徒も、だれの助けも借りずにちゃんと意見を述べていたという。

「生徒がディベートに乗り気になってくれたのは、きつとゲーム性があるからなんだろうね。それにディベートのときは『それでは第一反駁をします』とか、『証拠資料を引用します』と

各 教室では4人で1班のグループに分かれてディベートが行われる。資料を見つめ、反論を考える生徒たちの表情も真剣そのもの。



先生方から「私にはとても指導できない」という声があつたんです。ディベートには『発生活過程』『重要性・深刻性』『反駁』などの専門用語があるんですが、これらの言葉が難しく感じられたみたいですね。また、ディベートならではの討論の進め方についても、自信の持てない先生が多かつたようです。

岡田先生は、ほかの先生方の戸惑いについてはある程度予想していた。なにしろ岡田先生自身も最初に講習を受けたときはそうだったのだから。岡田先生は、担任の先生方の負担を少なくするための対応策を考え、脇町高校には放送スタジオがあり、各クラスにはテレビが置かれている。そこで岡田先生自身がスタジオに入り、テレビを通じて生徒にディベートについての説明や指示を送ることにした。担任は教室にいて生徒の様子を見守ったり、岡田先生の指示に基づいて板書をしていけばそれで済むわけだ。こうしたやり方は、3年目を迎えた今でも継続している。

教師にとつて、 としてももちろん生徒にとつても初体験のディベート。岡田先生は「生徒は緊張する

だらうな」と予想していた。普段、授業中に教

いった普段使わないような言葉遣いをするなんて。生徒はちょっと背伸びができるぞという話し方を、楽しんでるんじゃないのかな」

岡田先生は、生徒の討論内容のレベルそのものは、あえて問あつとは思わないという。高校生の段階では、ディベートというゲームを楽しめればそれでいいと思っている。それに、ディベートの技術を本格的に高めようとするなら、とても1年に2、3回程度のディベート活動では不可能だ。

「生徒がディベート活動を通じて、物事を論理的に把握していくときの思考の組み立て方を、なんとなくでも理解してくれることがねらいです。それだけでも、入試の小論文はもろろ社会に出てなにかの課題を解決しなくてはいけないときにも、きつと役に立つはず」

昨年の9月の文化祭では、クラス代表による校内ディベート大会も実施された。発案したのは教師ではなく生徒自身だ。「3年の部」の会場となった体育館には、スクリーンとプロジェクターを用意。体育館の照明は暗めに落とされ、生徒は資料をスクリーンに映しながら意見を述べていった。舞台横にはバスケットボールの試合で使う大きなタイマーが置かれ、肯定側と否定側の残り時間が正確に刻まれていった。時間が過ぎるとブザーというブザーが鳴る。白熱した議論と凝った演出に、生徒たちは大いに盛り上がった。特に1年生の中には「私も先輩のようにカッコよく話せるようになりたい」と、感動する生徒が多かつたようだ。

物 事を論理的に把握していくときの思考の流れをなんとなくでも理解してくれば……。それが岡田先生のディベートに寄せる期待だ。



師が質問すると「わかりません」といつたままうつぶいにいる生徒も少なくない。だがディベートでは、相手の意見をメモしながらなんらかの反論をすることを余儀なくされる。「だからこそ生徒にとっては新鮮で、試みとしておもしろい」と先生は考えた。

いざディベートが始まってみると、生徒たちは予想に反し嬉々として討論に参加し始めた。

順調に滑り出した

よつに見えるディ

ベート活動だが「実は、少し行き詰まっていることがあるんです」と、岡田先生は打ち明ける。一つは、ディベートのHRのときに、岡田先生がスタジオからテレビを使って生徒に指示を与え、担任は教室で生徒を見守るといつやり方だ。担任の負担を少なくするという意味では効果的だが、逆にいつと担任はその自分発性を発揮することができず、教室の中での存在が薄くなりがちである。「担任の負担の軽減」と「担任の自発性の創出」の両立は大きな課題だ。

もう一つは、4人で1グループを作らせてディベートをさせるといつ進め方だ。40人学級だと、全部で10個のグループができ上がる。HRの時間内にディベートを終わらせるには、1グループごとに討論させて、ほかの生徒はそれを聞くという形式は採れない。一つの教室で10個のグループが一斉に討論を繰り返すことになる。教師としては「このグループはどんな討論をしているのだろう」と知りたいところだが、とてもじっくりと聞き取ることはできない。したがって、生徒に対する確かな指導もしくくなる。そこは担任としては、不満が募るのだ。

「でも、正直にいつて対応策が浮かばないんです。だれかいいアイデアがあつたら教えてほしいくらいですね」

二つの課題を解決できれば、脇町高校のディベート活動はさらに高い段階に飛躍できるはずなのだ。岡田先生は模索を続けている。

「DO YOUR BEST」

というA4判

で一枚のプリントを、静岡県立浜松南高校進路指導課では生徒に向けて年に10〜15回ほど配付している。内容は進路のこと、補習や模試のことなど、ほかの高校で出している「進路課からお知らせ」とか「進路だより」といったプリントとそれほど変わりはない。一つだけ違うのは、それが教師が生徒に語りかけるような形で書かれているということだ。補習時間や大学説明会の日時といった事務的な連絡事項のときでも、なんらかの語りかけが加えられている。

例えば今年の6月11日、3年生向けに出された「DO YOUR BEST」を読んでもみると、このときのテーマは「学習スタイルの確立」と「進路閲覧室の使い方」である。ここでもやはり本題に入る前に、同校の文化祭である波濤祭はつうさいに触れた生徒への語りかけが添えられている。少し長くなるが引用してみよう。

「今年の波濤祭は例年に比べてどうでした？」と生徒会担当の内山先生に聞いたら「実はワタクシはすつと波濤館はつうくわんにいてあまり見ていないのです。」なによりも観客数が例年の3倍だし、

して焦るなー、ほとんどの諸君は「さあ、勉強だ！」という状態に突入するはずである。以下、略

その「なにか」今回の「DO YOUR BEST」の本題である「きみ自身の勉強のスタイルを確立してほしい」という話が始まる。

「この執筆を担当したのは、進路指導課の渥美健先生である。渥美先生に限

浜 松南高校の生徒たちとはよく職員室に顧問に来る。生徒と教師の距離の近さを感じさせる。



静岡県立 浜松南高校

教師と

生徒による濃密な

進路指導を展開



静岡県立浜松南高校進路指導課長
渥美健 Asami Ken
昭和32年静岡県生まれ。
国語科担当
教師になって今年で19年目。
前任校は藤枝東高校。
演劇部の顧問でもある。

来てくれた人たちも本校の生徒もみんな楽しんでくれて盛り上がったんじゃないかなあ。3年生はよくがんばったと思いますよ。」ということであった。前号の「DO YOUR BEST」に「だいたいぶかなあ」なんて書いて失礼しました。今回は「きみたちもやるときはやるじゃん」と

らず、ほかの教師が「DO YOUR BEST」を担当するときにも、基本的にはこのスタイルは変わらない。また「DO YOUR BEST」以外のプリントに関しても、生徒に語りかけていくとする姿勢は共通している。同じく進路指導課の太田佳純先生は、こんなふうに話す。

「生徒へのプリントは工夫して書くもんだ、そういうものなんだと、どの教師も思っています。教師も自分の個性を發揮できるので、楽しんでる面もありますよ。」

生徒に語りかける

姿勢を、浜松南高校進

路指導課が大切にしているようになったのは、ちょっとしたきっかけがある。

同校はかつて、普通科とともに商業科も併設していた。ところが平成元年秋季に、翌年からの商業科の生徒募集を停止することが決まった。当然進路指導課でも、指導方針の見直しをしなければいけないことになった。そのときにリーダーシップを發揮したのが、その後進路指導課長を務めることになったT先生だった。

「T先生とはよく、どうすれば進路指導課がよくなるかという話をしましたね。私は当時まだ30歳をちょっと過ぎた若手だったので、T先生の言葉はいろいろ勉強になりました。教科も同じ国語でしたしね（渥美先生）」

渥美先生にとって印象的な出来事がある。ある日のこと、渥美先生とT先生は学校が終わったあと、いっしょに夕食に出かけた。食事中、T先生はほつりとこんなことをいったぞうだ。



静岡県立浜松南高校進路指導課
太田佳純 Ohta Yoshitami
昭和33年静岡県生まれ。
地歴公民を担当。
前任校は湖西高校。
浜松南高校に赴任して4年目。
今年度は1年生のクラス担任

「自分たちは国語の教師なんだからさ、言葉を信じる指導をやってみようや」

T先生が進路指導課長だったころにスタートさせて、今も続いているプリントや行事はいくつもあつた。「DO YOUR BEST」はその一つだ。保護者向けには「さぞさんごう」を發行している。進路指導に関する行事としては、毎年2月に3年生のクラスを担任した教師が2年生のクラスを訪れて、生徒たちに受験のことや最後の1年間の過ごし方について話す「進路講話」を実施。また3月には、受験を終えたばかりの3年生が、2年生を前にして自分の受験生活を話す「受験体験を語る会」を設けている。どれもこれも、言葉を信じ、語りかけを重視している点で一貫している。

「うちの進路指導課では、目に見えるような派手な行事はあまりやっていないんですよ。形が立派なことより、思いがこもっている方が大切ですからね。うちの一番の特徴は生徒に語りかけることで、それ以外はやっていないといつてもいいかもしれません（渥美先生）」

進路指導や受験指導をたまたまスケジュールに沿ってこなすのではなく、生徒とのコミュニケーションを重視し、生徒に語りかけることによつて、生徒の意識を受験や将来の進路へと向かわせる。基本的なことではあるけれど、実践しようとするとかかなり難しいことに、渥美先生たちは挑戦しているようだ。

形ではなく中身が大事という考え方は、補習のやり方にも象徴的に表れている。多くの学校

では、年間計画の中に補習期間を組み込んでいるケースが多い。先生方のスケジュールを調整するためには、その方が都合がいいからだ。だが同校の進路指導課では、あくまでも補習は生徒の様子を見ながら行っている。

「補習は、必要があるからやるものですよね。模試の成績で数学が悪かったとか、今年の1年生は英語の基礎ができていないよといったか、なにか状況が表れたときに補習をポツと入れると生徒の食いつきもいいんです。もちろんその分補習を実施するときには各先生方の時間調整が大変になりますけどね。でも指導とは、型にハマってやるのが決まっているからやるというものではないと思うんです」(渥美先生)

今年2月、 当時3年生の担任をしていた太田佳純先生は、恒例の「進路講話」のために、2年生の生徒を前に受験に関する話をする事になった。浜松南高校に赴任して3年目だった太田先生にとって、「進路講話」は初めての体験だった。ちなみに「進路講話」では、3年理系のクラスを担当した教師は2年理系クラスでの講話、国公立文系の担任は2年の国公立文系で、というふうに割り振られている。それぞれの教師が、自分が担任

3月半ばには、

今度は現役の3年生が2年生に

語りかける「受験体験を語る会」が開かれる。「進路講話」と同じく、3年理系の生徒は2年生の理系クラスを、3年私立文系の生徒は2年生の私立文系クラスを訪れ、話をする。代表として話す生徒は1クラス4人ずつ、1人当たり10〜15分程度の時間配分となっている。

「話をしてもうっとうしい生徒は、必ずしも

「受験体験を語る会」などを通して、浜松南高校の生徒たちは互いに刺激し合いながら、進路意識を高めていく。



したクラスを振り返って「3年生が1年間をどのように過ごしたか」「どのように過ごすべきだったか」について語るというものだ。

当時、太田先生が担任していた3年生のクラスは私立文系志望クラス。最終的にはほとんどの生徒が大学進学を果たしたというものの、スタートにすぎず、最後まで苦しんだ生徒が多かった。「入試はスタートが大事」ということを、先生は2年生に訴えたかった。

「でも通り一遍のことを話しても、生徒は眠くなるばかりで聞いてくれません。そこで作ったのが『こつこつ子は???』というYES/NO式のチェックシート。『自分はどのような進路が適しているのか、最後まで先生に聞いてくる子』、『2時間くらい集中して勉強できない子』といった項目をいくつか用意して、それに自分が当てはまるかどうか、生徒にxをつけてもらいました。その項目を基に、自分が担任したクラスの生徒の例を出したりしながら、話すようにしたんです」(太田先生)

「進路講話」は、生徒の受験意識を高めるメリットがあるだけではない。3年生の担任である教師にとって、2年生は普段接したことがない生徒ばかりだ。HRとは違い、未知の生徒を

じょうずに受験をこなした生徒ばかりを選ばなければなりません。途中で志望学部が変わった子や、最後まで英語の成績が伸び悩んでいた子など、受験に苦労したと思われる生徒にも依頼するようになっています」(太田先生)

3月半ばというと、国公立大の前期の合格発表や、私立大入試が一息ついたぐらいの時期である。それだけに、代表として語る3年生の言葉も、実感のこもったものになる。もちろん、高校生が10分なり15分なりの時間を1人で話せるのは大変なことだが、そんなときは教師が「部活を引退したあと、なかなか気持ちを切り換えられなくて苦労していたよな」とか、「冬休み以降のがんばりがすごかったよね」というふうに発表者に声をかけ、話の道筋を立ててあげる。話を聞く2年生の態度も最も身近な先輩の言葉が聞けるだけに、真剣そのものだという。

「以前、サッカーで静岡県の高校選抜チームにも選ばれた生徒がいたんですが、彼の体験談は印象的でした。その子はうちの生徒ならだれでも知っている有名な選手でした。現役で静岡大に進んだんですが、彼がみんなを前にこんなふうにいっていたんです。『僕は11月まで部活があったので、冬休みは寝ないで勉強しました。でも死にませんでした。みんなも合格したいなら、それぐらいのつもりでがんばってください。みんなが知っている彼の言葉だけに、2年生の心にずしりと響いたはずですよ」(渥美先生)

「受験体験を語る会」でなにを語るかは、生徒の自主性に任せている。ただし渥美先生は「そ

3年理系クラスの担任による、2年理系クラスでの進路講話。進路講話で生徒は受験意識を高め、教師は語りかける力を養う。



相手にした緊張感を味わうことになる。また教科書があるわけではないので、自分で講話のストーリーを組み立てていくにはいけない。「進路講話」は、教師が生徒へ語りかけていく力を鍛える場でもあるわけだ。

「努力はしていませんでした」とだけはいわせないうようにしている。生徒はみんなを前にするとつい謙遜(けんそん)して「自分なんてそんなに……」と話しがちだ。でもそれでは先輩たちが誤解してしまつ。「僕はこんなにがんばった。だからききも」と先輩が語りかけ、後輩はその言葉を受けとめることで受験に対する意識を高めていく。「受験体験を語る会」のねらいはそこにある。

進路講話

や「受験体験を語る会」は教師が生徒に、生徒が生徒に語りかける機会を意図的に設定した行事である。だが語りかけは、一部の行事だけではなく日常的に行われることが、むしろ重要である。

「努力はしているつもりです。この前の学年会でも先生方に『面接をたくさんやってください』と話しました。面接といっても、例えば模試を返すときに1人ひとり声をかけて、ここは失敗だったなとか、ここは苦手だったのに克服できたなとか、そんなひと言でいいと思うんです」(渥美先生)

効果は表れている。浜松南高校の生徒は、とにかくよく職員室に質問に来るといふ。教師と生徒との距離はかなり近い。また夏休みや文化祭のときには、驚くほどの数の卒業生たちが母校を訪ねてくる。彼らは職員室で近況報告をし、部活に顔を出して後輩たちに大学生活の話や入試のアドバイスをする。それが後輩たちにとって、貴重な進路情報、受験情報にもなる。

人と人とのつながりが、浜松南高校の進路指導を、濃密なものにしているのだ。